上三川 この日なんの日

初代上三川城主横田頼業の死
（1277〈建治3〉年8月11日）

上三川の町は、鎌倉時代に築かれた城を中心に発展したといっても過言ではありません。宇都宮氏の南方の要として、1249年に築かれた上三川城は、時の宇都宮家一族の横田頼業が上三川城主となりました。横田頼業は上三川だけでなく、鎌倉などでも活躍し、その様子は鎌倉幕府によって編さんされた史書である『吾妻鏡』にも記されています。

1196年に、時の宇都宮家当主頼綱の子供として頼業は生を受け、宇都宮城下で幼年そして青春時代を過ごしたと考えられます。しかし、宇都宮家は鎌倉幕府の有力御家人であったことから、頼業は当主の子息として早くから歴史の表舞台に立つこととなります。1219年、23歳の頼業は、幕府が京より新たに迎え入れた将軍藤原頼経の鎌倉入りに際して、その行列の先陣に加わり、宇都宮家の若武者として、初めて中央の表舞台に立ちました。1221年におきた日本を二分した承久の乱では、京都にて強弓を射て勇猛果敢に戦い幕府方を勝利に導きました。実際に弓矢の腕前はなかなかのものであったらしく、1228年には、三浦泰村の屋敷で行なわれた遠笠懸・小笠懸に参加したほか、1235年にも後藤基綱の屋敷にて将軍頼経を招いて行なわれた宴席でも、弓矢の腕前を披露しています。

1237年10月に頼業は、横田郷兵庫塚（現…宇都宮市）に居館を作り分家しますが、このあとも、宇都宮家の一員として、鎌倉で将軍の警備などの仕事で忙しい日々を送ります。この後、1249年に宇都宮家の領域の南の要として上三川城が築城されると、頼業は兵庫塚より移り城主となりましたが、これまで同様、鎌倉で警備などの仕事に追われ、上三川で過ごす日は少なかったようです。しかし、1263年6月に病気のために体調を崩し、幕府に帰国願いを出すと、8月に将軍宗尊親王の警護を最後に上三川城に戻りました。

この後、頼業は上三川で静かな日々を送り、1277年8月11日に81年の波乱に満ちた生涯に幕を閉じました。

頼業は、宇都宮家の当主の子息との立場から、一地方の武士にとどまらず、鎌倉を中心に、遠くは京の都でも活躍しました。その一方で350年間に渡る上三川城の基礎を築いたのでした。

善応寺にある横田家累代の墓

広報短歌

絡繰りの時計に寄りてときを待つ正午の広場静まりてをり　稲葉　敬子

継接（つぎはぎ）も芸術品となりしいま麦秋の彩り乏しくなりぬ　斎藤アツ子

望みたることのいくつを成す生ぞ一生（よ）易しきものにはあらず　沢谷　郁子

新緑の山ふところに真白なる傘いっぱいのみづき花咲く　高田　幸子

ドア越しにリハビリ体操のぞき見てわが身の体力そっと確かむ　小島　キミ

白き肌丸みおびつつ玉葱の肩よせ合いぬ薄暮の畑に　高橋ツギ子

雅なる平家一族呑み込みし現つの海のひたに穏しき　武藤　ひさ

末孫の酪農継ぐと進学し選ばれて出る全国大会　井沢　和江

朝霧の消えゆく樹林を郭公の里の静寂に声の澄みくる　菊地　美代